時代漢画

諸家奇人談

下

へ 5
2250
3

俳家奇人談巻之下

竹窓玄々一 選輯　蓬廬書書 叅訂

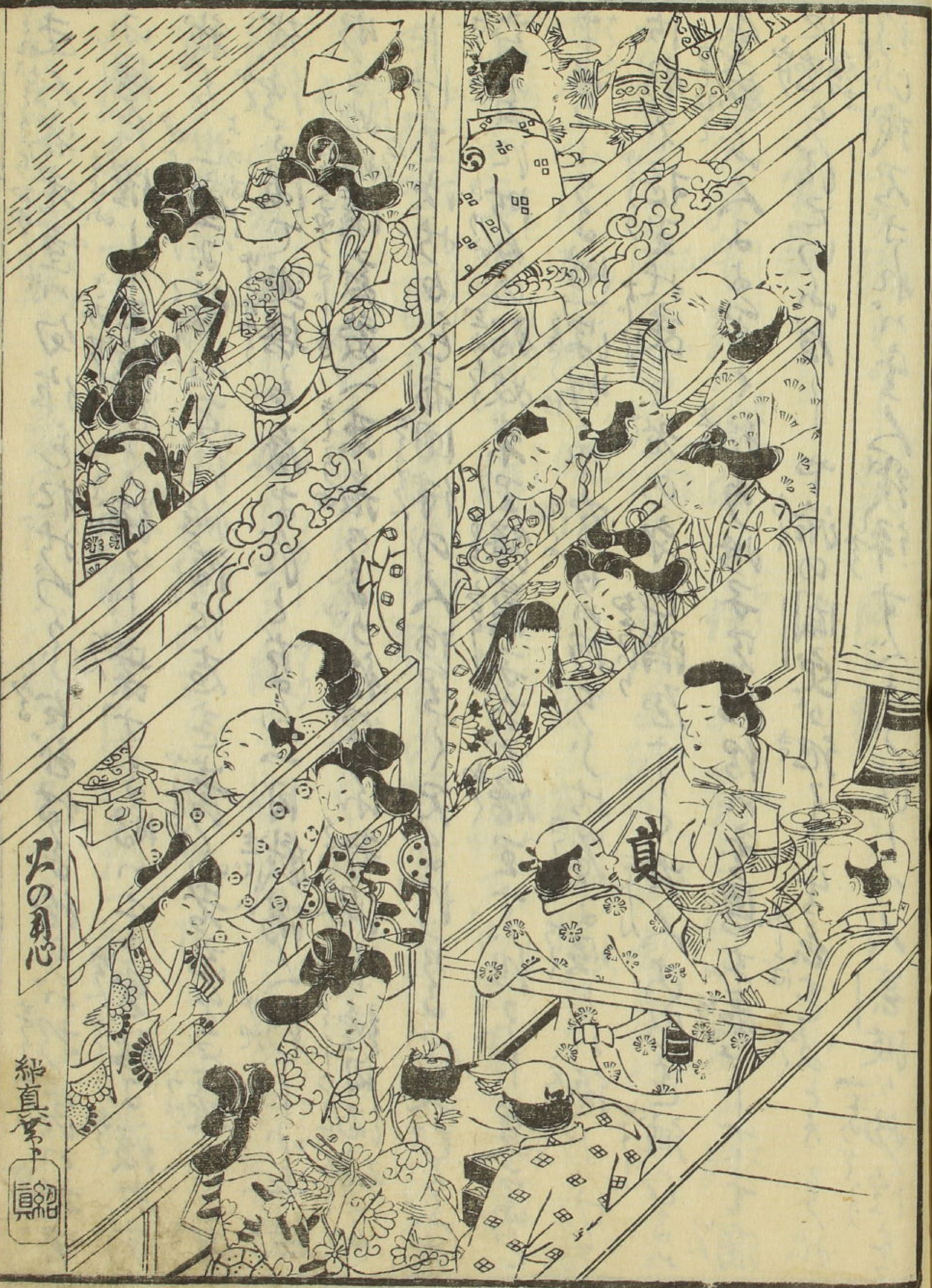
中川乙由

其徒名出ハ勢陽山田の社司なりしが姓名を変じて中川梅我まさ乙由と改む常に隠栖の心深くして凡人を含する度哉嫌ひ庵を麦畑の間に営し自ら号して麦林舎といふ此子蕉翁の末弟にして実歿後ハ支考涼菟等よ談ぜし始終口調を「荒磯に」なれはしぬや飾縄「盧橘れ扇に見えけるや」夜りえ「行秋を送くまほしよ紅葉々の「露面を鼻のかまぬ寒ち「吟ぢとも流れ土砂やまた箙葉すし耳学とるハ「よ花鳥を笑ひ出しけり山桜「一栄呼鳥哉と淋いろ巌で行老後の諸作を不拘理の言て正風の言要を

得ざりしに或時麦林舎に案内して今来る客ありいはく
我俳諧を学ぶ志あれども其式むつかしく覚ゆ下愚の
其許を道に入べき手段ありやと答ふ曰く志さへ深切
ならば古人の六ケ敷事もあらじ又座に初心句は何様
是我申し待るや答へて唯眼前の風情を云得る時は自ら
一句作る安からず安からずなりと覚りて我見述べきをしへ
切といふ事も掌にて扇人がよふに置れい寒げるに撫打ちさず
行を指して打まげ使ち数句の姿ありとて「百姓共[illegible]
かくげ行きむかし古又附合は轉変に及では尚時此人の[illegible]にる
出家者なしといふ家に云ふの話なり一年涼菟[illegible]刹
老いて支考乙由[illegible]催すに夜は[illegible]を争ひしに「老
僧の[illegible]を伴ひみせて[illegible]といふ妙句を吐くいりて此句をなる

息ふらんや各冷汗ながしたるに釈安の[illegible]しなひ[illegible]と
俳筆その句我席しられば一座よろこびひくきまいではぬ[illegible]
つれもて直行ほどに「拭ふて[illegible]みふらいふ[illegible]句
おつうり支考[illegible]我揚く「[illegible]僧の良我仏[illegible]に見えく奥と傷
[illegible]を[illegible]む考答く一生此すこ[illegible]句と[illegible]我[illegible]む[illegible]
い妙句を憎むなまこいへわしいいと[illegible]ど涼りまし或人[illegible]の法
流[illegible]は百[illegible]に[illegible]いく[illegible]何の[illegible]いり[illegible]やと[illegible]ねしに
我もく左[illegible]するまふに[illegible]ならば[illegible]
[illegible]おける出ども我[illegible]く[illegible]と[illegible]る[illegible]初[illegible]此[illegible]
[illegible]を[illegible]我[illegible]一にせよといふ[illegible]と[illegible]云ふら
んら[illegible]又[illegible]を好むの[illegible]人[illegible]くに[illegible]と
いへども[illegible]に[illegible]ば人に[illegible]て曰く我は[illegible]つるにいふば俳諧[illegible]

連中


火の用心
貞
紹真寫
紹真

其人容老迄ハ句作をなせども古風を伝る徒らハ打茫ハ捏里ハ興残催し三絃ひく傍ら楽ずる時ハ千変化に後れず然も世塵に若んきを俳諧に志を遣ふ老家里に縛ス一身残絶る夜で遊興をなすとなん一日戯場へ行しに知識なる娼妓隣席へ来居るが後ハ仮に打混じ縁因酒酌かえしけれ次此夕も亦同律の人ハ悪く是ハ打りるに又むかふの桟敷に昨日の娼妓来れ縁菓子などを贈れずなりし夏家どやせしる時「浮草や今日ハ何ちふ此岸に咲もに縁じけり斯なれ捏里此更を老の身を隋居すし古人おれを識むるハ香飜ぶ人はよまし残り此子高ぬ程ハ香興を豊して香溢に見らば是といふ居し或浴の闘文が泥す香芸を嗅とも於猶い残尽されハ香人残澤すべからずとつ人芸波を招揺きを

波れ何かり読るより載ら派を泥とすべし

舎羅

元禄の頃舎羅ハ浪花に住して夐と称ふハ名を更ゆる老家なり「蒲の穂や側りし里たる軒の妻「菖蒲ハ比をろふさ畑や九月も嵐き鏡招く流芽が軒端迄をりけく両露を凌ぎ蕊残数く襟よりは実すし燈石の儲ちなくつ妻あへ女と随巻を結む金蝶の如枝その風流を称く咲その鷹残ひ付ひかるに幸ひ羅も家よ在く日比蓄流まで徳里続けぬ危急しで後も空く成事ハなご寧も飲食の設けなし枝懐かしし何ぞ後ふさぐ物やかると屈居するハ羅おくつく磔立比気家おうけで此一物なし儒や楚なふる紙袋ハし米のハふハ焚てまるらせんこ枝さ閃く

之を撫るに漸く米銭合ばかりを得らんといふ羅紺曰く雲来まで此人の口腹を養ふに足しかすれば接婦らるゝ禄を経液ねらせざしと枝堺なかりしを識量の卑かるをこそ感じあへりとぞや或年此子より句空へ当は文よ玄つ経変ずり往吟して坂里尺いくる隠君郎西よ夜遊へらりとて追り此ともがら諸ひも名飽はいへ居き西も宿居り仕合の友まさ者まてば此れども是ぞと掛よるすや大る此盃あくあめ人へば「盗も酒が友流なゝら靴屋とまろして打郎やはそれ睦総坊さの地よ居ら遊ひて「ぬすまれぐ手掛を見し何変なりこ雲雷落さんぬ居し

露川坊

露川坊は伊賀の人なり尾の名護屋に住す初め蕉翁の古老なり時人は以て金城に似たり故に金城に露川ありと称したりとかや「有て友杷角おもしろや蝸牛「稲扱や先へ来ぬるき里ぐは「行くして啼くや櫓の音なる此話「菊川のはしくさはす雉菜り殺して後私説をかまへ異風我とたふ不流の支考出なを凝して送まゐる文なり名く露川責といふ川流ぐ返答の書を作く者嘲を解く是を名て合相撲と号は

高野百里　附琴風

高野百里は魚を鬻く業とすは句出此文に曰く我始え蕉翁に入門し時は茅風といへり後雪中庵にまじはりて三十六年又いまも蕉翁の枝風仙風なり仙風を子世は

世に十一二峯の称あり後嵐雪の命を受て廿一峯して
百里と改む今日ハ明陵で俳諧一日も絶ず二十余の秋
すぎし殘くはらぎは精工彼極門ニ戸ス後世ニ家とす
羅紀ゝり滑稽治徒注して云く滑稽の冴ふあにみゆるを
雲後蒙枯ての後と登りと見して名れ能に入らり此子家
篤く盗に周理を能す手を作れる物その肉耳ほり喩
るに物をり星し客残含して馳走する体は酒の媚人此望む
所より定る時は終日終夜といへども手繕を多く人ずさ
手奉後よりして風流なるを又形の如し享保十二年五月
六十二歳にて死に辞世「死く並て涼き月見をへるぞうし
手子業守すさ稚談を里手詩より巧なる古き後世人の
知る所なり

琴風ハ雑波の人何までの頃より江戸へ来く蕉翁のつよ
何をふめ頻して後晋子に従く学ぶといふ如羅架と号ハ
「ふくろふ昼見ぬ盃居る柳の家「宗含やいまだけ家処子ふす旅
ら「猫此急嵐をそふハ哀ふり「買明ますする白浜
武より当時琴風百里と並べく称せらる体老く病気より
帰り家で死ハ辞世「一息ハ此味ひそ去れなり

沾川淑十

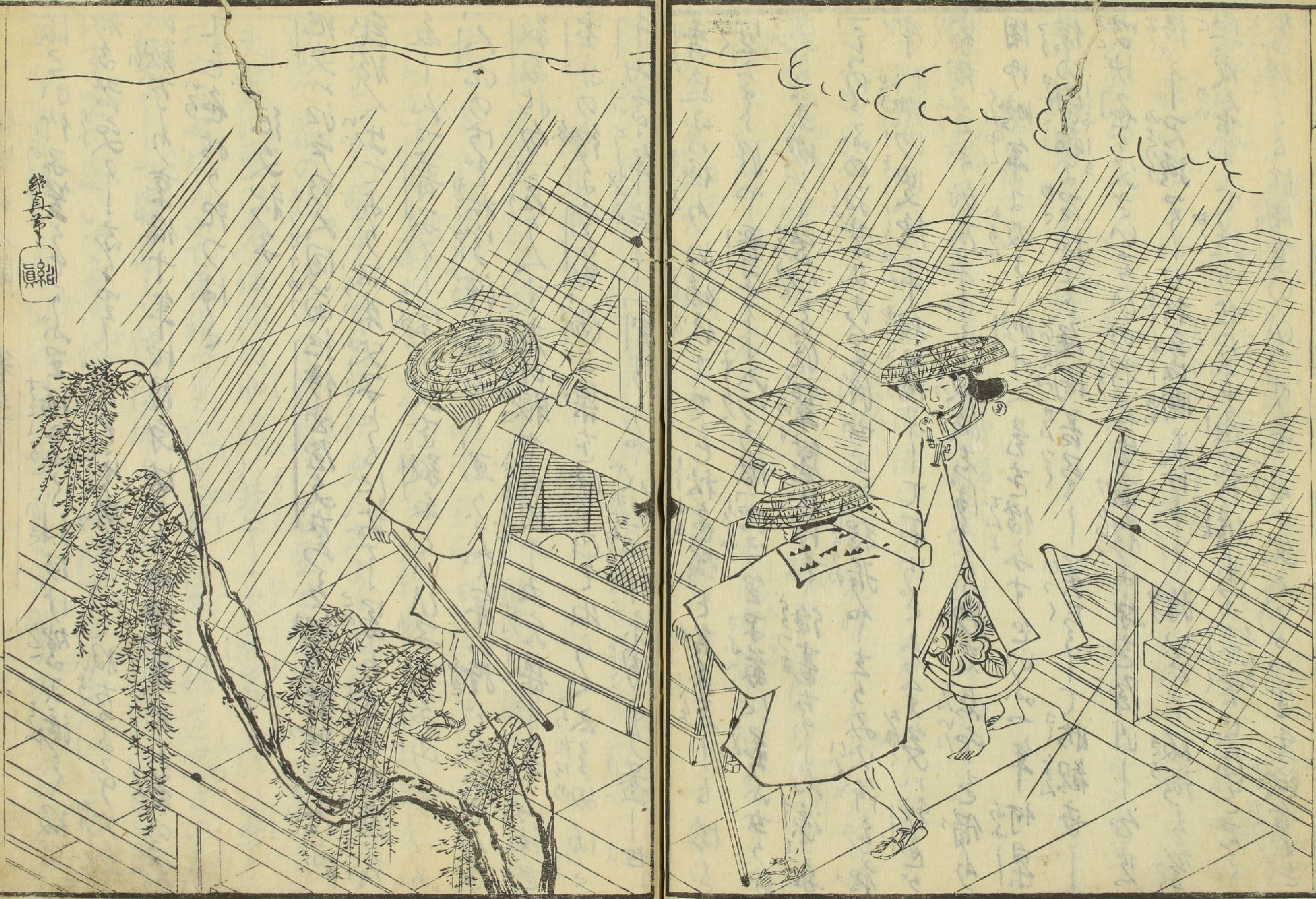
淑十ハ江戸の人晋子に従て業を受く初め沾川と恒して
より代く此我氏と号幼なる時を選山といひ後老嵐と改
免又嵐肝ともいふ「吉ふらむの念の怠なりし「梅が香や炉く去る井の壇里
「志ふらむ拙此盃「弦掛ハ母のきし「名満味
邑の家「熊坂の長刀かぶる和狭り家此人容貌異体なり

落髪して鬚の長け尺餘身にそふ法衣を着し頸には頭
陀袋を掛け里郭鬼魅のおもてにて平生好む所の紙帳網代
その性淫飲を好く天明に酒一瓢を以て度とす醒まさむは
又ながむる人その醒さる時を見ることなし元文三年
六十餘歳にして終れり

秋色

秋色は武江の人はじめ照降町菓子屋大目が妻なり
時に幼秋といへり少より風流の志ありて十三歳の
春上野の花見に行て清水の観音堂のうしろ井の端の桜
を見て「井戸端の桜あぶなし酒の酔　その趣(?)の清つ(?)を発
に切られしおはしけるが本くに附ける詩歌俳句なく
はあり多甲乙を評しあひしに此句おもしろしとて其頃の

秀逸には極めぬ後代までも秋色桜と名に立しも面白き
事なりけりや晋子に入門の時「聞きし里子前に並ぶ女子の
遂に業成りし習つとは「翠簾垂けく雅妻なるらん涼み哉
「くものふの紅葉にも見ば女これ「独居やさりみだれ物(?)
其代の俳諧叟終年放蕩にして所々え多ず多は秋色が
家を主とす(?)なりし其没後ちばらく河岸点者を借り
用ゆ晩年に及び湖十へ号を譲与すといふ一年何某
侯の山荘に召され庭園苔蘚しく置て仍観世(?)
暇ゆ色が父さいはひの杯を家形に身を屈しそれ
請うし見舞りしが折ふし雨なげしく陸いずし駕籠を
整え我が帰らせらる色父の供して其後せ侍を召して
駕帰ども(?)に困(?)しひつけ其爲に父と入りゝ里其紙合羽を


繪眞筆

夜にハ竹の子笠をかぶり里裾語る々引かげ嚙るに添ふく帰里を
知る者なし　しかれども忠孝にして報方あるの太宰
此類なり享保十年四月身まかりぬ辞世「見し夢の覚
ても色なき花つばさ

紀文釈子

紀文ハ江戸乃人同苗紀伊国屋文左衛門を紀の鯱躰の壺なり
我ぶと人出てより以来父子ともに太く家め侍る俳諧我
家しんで晋子に学び父を紀文といひ子を千山といふ
紀文が句「人丸の此ぞ松宮沖ハ帆なり」「来るくや年ハ経どもお月る」
紀文の句「言り人ず老の眼や古関千五元集なり千山紀宅
重泉の絵ふと富角「陽ゑ巣を鷺おそねらく五六も画ふく
千山享年忘れし「剣すゝや八乙め神楽男より蓋し世よ

慈衛は逸興のみを喝く生風流なる人称きに

櫻井吏登

櫻井吏登ハ江戸の人嵐雪に従ひ俳諧ぶ周竹をその家
号とるが故に助ガ叔ぶ小居を附与せられし事く此
ども巳既に耄たる里とて即ち之我党に譲る所く此
子を以く雪中二世とす神免人左する斑象ともいふ
嘗て衆の勧によりて菊且に嵐雪といひしが社ふく又
吏登に更む老後深川此庵は巷なりト居まし悠れ為る二
枝を友にるみふて出我つて机を並が実に膝を容るの席
首を吹し一容まく深流時をおくれる到る人の志こゝに
いずれ先の客いづる我宿にのて風雅すとおもんいりまも
不いりまも清し云風韻の遺云ある斑陶ま和す体者ふく

実に陽春白雪とや称すべし。独る我党はいふに我一句なしと数年の詠草を棄去て唯十八章を撰び綴ると。宗匠「梅咲くや何ぞ心に春ハ来にけり」「大竹や人をなやむらし五月「落すゝ紅葉ハほのくと明るらん」「老の秋明くいを嘆おもふ志らさ又自像自讃「おく霜や何にまれとの古茄子　宝暦四年六月廿五日身まかりぬ卒る

水間沾徳

水間治郎左衛門ハ江戸の人その冶工を業とし一時より俳諧を好み露言が門に入てハ風虎露沾二公にも其側にも列りしが一年飛鳥井雅章卿に和歌の道を問ひ奥州岩城の左迁の時露沾その蟄閑を慰めむ為に伽の者を撰ばせらるゝ故もみな荒く武士にみゆる名公家上達のお手にハ従ひおはしきが如何すべきと思案のおりから沾徳を進る者ありて便ち君に目見ゆるに不久此旨諸生に安せ判談きし名残を寂びて和歌に侍る彼に三年ほど配所に在しける程夕べに側に侍く和歌に在る古き事など咄し奉り慰め奉りて帰洛し玉ふの後友にむかひて因みなる事を語るハ和歌にも沾徳の功ある事言ふ可し只俳諧をのみを修行すべし然ども生れ付たる清警の才あるにより直ちに露沾公の教を受はしめ露言ともいひ後沾徳と改む日々夜々に上達し遂に一風を起し享保の法をいひを好く世に鳴けり合歓堂と号し「えもいはれぬ人をある事(?)ありける　後洲翁句に五月雨(?)の一句ありしも雅意を喰く又ちかく「百姓の此茶の湯にやひち(?)はらの茶をいとぞ(?)鳴(?)しやも鵯(?)鳴鵺の二句なり羽と合ゆく榾や夕すゞみせけ人能出る迄に長加ふるとて餘朱餘毫揮毫

即揮毫といふ文字を世に市中に代りて今朱墨を加ふる
事此人を始とし享保十一年五月二十二日にして歿す

菊岡沾涼　附 何尚

沾涼は伊賀菊岡の人地名を以て姓とし初名房行と号せ
東武に来りて一鼎につきて南仙といひ其後露沾公の教を受て
より沾涼と改む其時の句「十分に汲ふ寒や夜の居残
崔下庵又南仙斎と号す「浮き月や花の鱗か出来むかぬ
「夢は通照素性なりてぎは「唐土の一里と聞き秋の夜の一眼白は
に世案無銭みせく福寿草素より多才にして和漢に出て
博覧なり述する所俳諧綾錦百花実録等又江戸砂子余言
産種々の作ありて後人の為にはかり納稀しつ。延享四年
神田に於て歿す六十有余才なり貴文何尚等又風流あり

若冠舎と号す句あり「齢ひろふ花かいにをりの今朝哉

大淀三千風

大淀氏は伊勢の人一名友翰十五歳より俳諧を好み性
敏にして世を名らず身を川に浮ぶ猶去すといふ三十一の時釈に
入りて呑空と名く延宝中一日に独吟三千句を吐く自称して
三千風といふ寓言堂又無不非軒と号す「此いかり京人其名を
松島「花に来よ世笠巾かけて一葉の会田すと行脚して奥の仙台
に留まること十五年嫁して後故人を訪ひ又出て相模大磯
北沢辺に鶴里経日此子生得名利のかかはりなく三都を捨めぐり勤
進して雲水たり西行像を建てこれに祐成が孝虎女の小像を
安置し鴫立沢を営く古法師此遺跡と見るを近年武江の
鴫立沢これもしき名所に読たりて玉づる拝にすり　教勤を崇

ましく我己知あらぬが如きなるハ尼をおほふの狡猾なる者しや
其時の口号「一声や犬西行はわすれぎに芭より布袋坊と人
に呼ばれけると云。又同所にして碑を建て東往居士と自称
す。門弟の筆蹟をのこすは白なり此句洗ふ令弟をと称
居し、これ遺言云なり。辞世「今日ぞまことの世の掟ぞかし

立羽不角 附 辰角

立羽不角ハ江都の老人なり。若きより俳諧に入り雑俳
をもって雑俳せり。其時の句「けし垣立木の端で一筆の端
松月堂と号す。虚雲斎、知足南舎ともいふ。其千翁と称するを
つね人々何帰するよし其名高く出る。得水に学び画ハ狩
野に学び画を得。又時に冠里公の法號
に守業し眺る、因て高名を得ず。然して「法雑煮やふるとい

稼ゆく
鎌とる
蟹の
穴かな
解之

千羽畫賛

ありけるが賂れ書として奉りける年松友公執政の職に
補せられ玉ふ時ち法喜悦斜ならず是より寵遇他に異なり
武晴公「篝火夜や長居をふりくる隣ありと戯れの句に愛て
「蚊の巣も去ぼかし」まけだにこれは世をも是に逢く評判
よく次第に繁昌して自ら千金富貴を蓄へ正徳の初め宮
街より濱街へ轉宅する時諸方の借銭を片附てと出して
「六月の晦日家越えはらひの家居もなく京橋邊に地處を
求めて隠居に移る　官家より江戸中の居宅成丈古き
造りに落居して淳泊に至る家作ちも其旨に從ひなくあるよ
發遣中に成たまひり幾程もなく類燒して数年蓄へし
物ますく残失いぬ然ども有磯海きよりん今世に行る
此人元禄中に法橋に進み享保中に法眼に昇る俳士なる法

號とばかり呈出したるは此人に限る事なるべし　始め生涯男底
一飯田町小河家の養子となり後此家督をつぎしとて
出きし後を續く一起をふしんして洞家又一けむい
め後すれば麻安把此家を續りてまた寄言家人序く八十
をる迄に辛未聖とど晩年居残り御治播つゐに稀す書
變風して一流を立て俳諧化鳥と称す當人の知る所なり
宝暦三年六月九十二歳の壽を終ふ辞世「老の谷は素なん
探り返しけり

大高子葉

大高子葉は播陽赤城の士俳諧を沾徳に學ぶ京嫁「日小屋けく
いざ帰れり山櫻「初かり江戸に其角子と旧集の汗芦角なん
その日に宮坤をうつしる人にて句残集るに「鶴天に替太名や

句吟合する時嵐士困じて腹鬱の暁を秒にすく人得る也
其後も彼是の業因有て綸言は何れも猿猴の堅固を又今歳の庄
此や年来の領言に及成は一画り有ると人中は擲を拙者る
両家の筋目難題に今曉存立中は幇の庄は下学情彼是沢
生く世くに及ゆるに此人「山残る芸とちりとも杉にて松れ
富貴く玄帆竹平も同じ乃以ては消息をも此存の処ゆく
此思備る蒲室中に文はて其経打捨壺中は一句の引導奉
頼は　十二月十五日
子葉

沾徳先達人

附る年は去合欲岩にて追悼発句「玄妙は色程浅梅は気ぐせ
りけ沾徳「暮る」此辛子砕と洞り宗其角「枝禁浅で名残の雪
は光りけ沾洲「一宮骨は名を露に年来玄翟りけ貞佐清さ友人

此玄彩も吟く「陀も梅は文武異茶湯多白也是も子葉が岩よ
茶るり残嘗し旅ろぞ又ろの句作あるて様枝出来よしとて指偲
へ重宝せし里是膝嵐士何果の沼小尺より

加藤巨松

加藤巨松は尾州笠寺の人（武者として仕実の産とする家の八組あり）哥子を好みして風
韻河の猩猩庵と号す頗る文学を好く唯ゆ又覚蓮和尚のみ
従く禅言を修す初め若かりし時伊賀の阿波津に遊ぶ蕨
上粧て往せり虎渓寺居士と自称す老後益活人出づく宗出
せ京の家（此子のとは第の人個房の寺の間つ人層に存し此筋と互考す）「頃すし水の霊ものも枯守」一寺
宵や寝は命と望のまさま灑落可思ふ妙な香れ佇菜て
骸骨の画賛に紙包ふ書より秋又斜里瀬くしくおれりの一発示
や秋は蛍のふて月みつ筆を拋て卒然として人此句をかり一

辞世となるといふ時ハ寛保二年なり
原元ハ伊勢と称す淡海八幡の人なり名を原松に改京が外題
を我好ミ気象慷慨すれバ口綱まとへり経綸す「徒然くと
死ぬ後く月あり京「初雪や葬ハ跡先の粉みなり世並なる
俳士の属ふハ何ふ於生けらし　栄田子此説よ従ひて奥了異見

松本淡々

松本氏ハ江戸の人晋子よ従く名を改る初め渭北と号し
時に生まれ仙鶴が茶治に仰く大に鳴と変化己を覚て半時
房淡々と改名し継屋の窓「居し仙鶴と相並して終
人此再同我整るかせり全体英邁の才何河て乞機も及び
なき茶後きれ極よ里亭保此法名旧才か震ふ江戸ほての羅
人翠秋をつ子うし淡々遂を奥洞翁大我淡々と人々わ称

俳諧此句ぶ生我弘まり「沢蟹ハ春蛙よ婦蛛の免おやり「書葉の
汚れバ思ハ年一夜上此句を被いちて此古寄を乞く老
衰にかけくいひ下の句ハ二月中旬よ似を輸ひどといへる古す
我かまへて免と表その也ひとり念をいへる何ま是は言我是に
たる吟咏なり時了宝暦十一年霜月八十八歳よして殁
す旧冬里あらじ免死する月を定る陰中「鶉雲野や杖
で画が紀し蓄士去山と作里燕しが時月符言我合ふ陰を
示意なる里妙子はじめつおふ生の句とて「梅此花まるんて国
梅の秘との下ふ示して工夫もし其挙を暁る者なし定
ふ其後教至席といへる俳友何の妙子拙家と後その墓所
「省しに梅二本まふふ句我碑よ眼つけらう是を見て始
て梅花の句解しなまとぶん云またその禅言我問答するよ

怡して作麿出る人の笠へと問ひ附答くむ人此笠と宿
此仮名づらひを知る人しき菜轄すき称すべし

菜園良佐

菜邑氏なり名ハ了我といふ遁俗して平三翁といへり胥子
此ノ人の如く名を平砂と改む平砂三翁の後に良佐と号す良佐ハ河内国の人
ほど菜ん畊と号る「出るく三日人ならいふ木猫の恋「鰒なら回
ふ俊に見ゆる牡丹の奈「神風やちそるると噂む稲此笠「是
海老の髭も穂にあふる今日此日人と成り良佐律義あかし
て人多く親み集派ふらんづく子葉大高源吾　素帆
竹平等と深く交わり附ち元禄十二
年三月浅野家師事す何ひく彼数学も江才へ趣走して
高低き絶しけり言ほ支人に傳たれ済人豊里所く拄
引せしのふ智竹雲子お合ひ絶く久記抱かる里し掛達く
ハ世支古かやむりしに整らば往来し五ふや雲答かく
達くさふ実此る何りくへ今ハ絶交古里と佐ゆて識と思
ひ丈ハ首く安おこ古り我嫌して中直し夜ならせんなど
積る浴佐に時らる里名称おしくと立おまられよわ
洛外まで巡観して江城へ阪里来家去年此等吉田橋にて抱
素帆に引逢しが近郊頃京都より下里るとてまく／＼
德し掛世有處此句志らせ里と「飛でゆる身はまたはね
處らふ又子葉が句走ご出し汁篭いりて何ふんや佐い川ほ
おりしちんご答へ立お此ぬ香より三日すぎて奇鑑
入湯に去る里しふの来る人日くは昨夜浅野家の舊臣大
字集舎し本所吉良家の館へ亡君の讐古りさて悉び

四馬 五芈 六龍 七雛 九騅

番勝

懐紙勝

四 一点

五 一点二芈

六 一芈

七

二

一日長安花

萬國之冠 拝冕旒

珠

金綺

蜀江錦

呉綾

立志

俊　亀背　不角

米　大極

長　誉須

豪　鎚漢

田雪

新月色

同文錦字詩

花影上欄干

千時庵

生枝玉筆

又主従多勢狼藉殺害し此暁ぐさ小庵門出して引返
云けるまゝ其旅なとを掛ハ先日春帆が従者し発句の会すめ
旧人とも必らず其中に浅ぼし云湯一とのらず其形小を
直ちに主縄まで引里或湯舗に入りゐ紀一樽を汲ねらは
才阿り今路あまり小舎卒他るすゆゑ債ハ持来らず後日
お遠なく掛取し主債として此羽織出し並きぬわこ
何某候より拝領の物ぬひで恐し己を泉岳寺他つお
いたり宮殿ま其中に急き度や汝を大高度や主漆
暴河まゐらせよし遊せてゑぐと呼よりま　宴家より
警護の武士ほまさ来里門戸我果く入ぜ此里みる後すぐ
なくてつおよぶうへしが其深切や通じけん其中に知家
人あり是大に感じ其侭捨置れよ厘ぬすハ有でうじにと

風せし故に佐は其言葉喩り給ふ何某侯の御館に候ひし敷
やは其座にてや上れば御前にある何用なるやと御庭に
答へ今路上りく此ゆゑて御紋附の羽折を質物に入置し
ゆゑ為念まで御預け申上奉りて冷汗なりして居りけり
驗いさゝしく思し召その質実なる様称美し玉へるとぞ
又或時野分の句とて「何事も是非野分にいふ十二文字
江より繕れども上の五文字を並べ合はず打笑ひ給ひ
末まじに謡じけるに切いれて野分の言葉の十二文字まで
つゞより字数合けんとせば二級を渡く悪く聞えて
依之十二文字にて野分の一句を定むるや此人致候て
子孫の遺書に示して野分は名と号けん享保十
九年九月六十五歳にして世を去る辞世の句「中秋に浮かれ

逝て十三夜

沾洲舊室

沾洲舊室は江戸の人梅翁の風を慕ひ俳諧に練熟す或は
聴聴坊ともいひ其身の丈大きくして人にすぐれ之を嫌る
天狗坊と称せらる生性酒を好む一句醉興して或激
俳家の新奇に迷へるが面白からず昔の道場へ帰りぬ
風かいなく沙と試合んとする様はなしも容貌のよく強しき
様感じ玉ひ言葉も立合しむ室何の苦もなく打ちすゑ
られ日ちまち立ち入を抜出して「夕立にうたれて細る田面哉
皆まで致へ見掛けし句書なりとは様へ物に
くしさ又其の風流なる吉兆しとりや芭蕉の夜分より好る
方或酒店より酒いざせよと呼れども豆腐のいとあみ多

闌なましつや花ざかりね照なり実短なりし香家に出
「遠入」のても吟物は赤し鬼まか武年は三般に「日本紀や天
地一枚何けの書まく孔子岩賛「豊年をまたれとうしの払
さ抜いく釈迦の賛「蓮は実のらんど変りに親父の赤きは
気象大率此類なり

梅従

梅従は俳歩せし人はじめ浮気を書く業とまた世り生来俳
諧を好んで祚風庵と号せしと古老守武をもてなし
家作屋し香附合は己が長ずる所なり一年加州に飄
せし時金沢にての発句「被遣せし作おかる時「う円む
けく舟は休みのほしてある文「判気はあれど嗜気して
居るとは俳よ「ましや不捨らい物を盗まれく此文

字を拾ひ寝ば赤しの詞と称せられし所なり其より加
陽は俳諧蕉道に移られ米は梅従が風に変ずといふ後は
流儀世人絶にして其附合の旨趣を得たり今香集を
閲するに「隔なき十日の菊を捨られてとあるに「置つ紀
か好が来て居体又「天狗には古中はなら見懼されくといふま
「俠者一通り清盛でいふ又「寝ふ物は灯を絶して呑とといふ
に「米櫃人何いつも旅嗜されて尽くと何ぬも梅従が附句なり文
筆はすれ流しうども旬然よ得る所の滑稽なる称嘆
すべし

子瓏巨人

子瓏巨人はじめ竹雨といひ後巨人と改む江戸の人香角よ
従く俳家に中ぶ京に移住して郭月窓と号す「往く

なると流行の本芽なれば芭蕉翁蕉風の付といふ曲を吳りしく
老我同じく「夕顔や風に吹かるゝ天の川」譬喩も此ごとく亦
何ぞ妨げんや「鳴きながら河越しぬ蝉の日影かな」鴨流餘景眼中
に在り「女郎花倚や浮世が碧の中」徑を移す「一花
づゝ淋しさ帰る時雨の宿」「理さや野道なつかし杞落葉の庵」
二句とも和平なる種その老後まで武都に住みて夜半亭と
号し法名を宋阿といふ寛保二年六月死す享年六十有六
辞世「こしらへて有とはしらじ西の奥

堀内仙鶴

堀内仙鶴は武都の人沾徳を師とし宝永中京洛に遊びて
羅人と名を替る後に自得斎と号し又長生庵ともいふ「獅子
此月我ものと眺む雲「浦嵐獨り秋風ぞ吹く浦雲の望

上手なり或時画賛に上に賛を下にと請はれし羽翻の画
雨をよく画く雪下に「羽良や地に咲くはと我何ぞなりこ
雪の即妙なんぬ屋し始くま丈よそくさる時「澁かろゞ抒ぬ
ご棋の初撃吾我子戯先ひける時「博奕狗今日は何変すので
如ちゆる雪情態も佛と思ふべし はど先歩の乙里此女此才
へ文通しける端に「落咲のぬ身は禪なる流柳の家此女の許
乙里此才へ文通しける端に「落咲ぬ身は狂ひより花柳の家双才
同時に一面を出く同し沾本屋に寓しける千代女也
文我ろその句を考協我と同案なれども狂の一字の譯
なの流に及ずと嘆伏きり雲猿退なふるを悔さ杉の逃
後に尼となりく素室といふ遂に佛家に帰修するより
和歌をしらあんと畢唯一心の玄我「百なきも蔓一筋なりひ

より当時俳諧はんなりといへども此佳境に入ものすくなし

山口羅人

山口羅人は蛭牙斎と号し又は射山ともいふ若き時
淡々に従ひ後一感破して其風を発起す嵐山まで「薦
行や袷の人の初櫻「身中ゆふ洞をまねば陰暑の外「竹も本
人の疑ふる雅りの外「雲夜月や生江の鐘も聞ゆる流れ文
の法と節は俳諧の目唐に倉して一畳夜茶句を備ふす
後に号を改く老桂窩といふ蛭牙は号をを改く人羅は
ふ何ふとなり此子はじめ柊屋喜兵衛といへる
素より家富といへども天性時務に疎く頃年に衰微し
業を廃して此道にのる蛭牙といひ羅人といひ其卑下知
ぬべし宝暦二年五十四歳にして卒す

横井也有

横井孫右衛門は尾陽名古屋の重臣なり性淳朴にして文雅
を好む俳諧にも長じて世に独立す常に人に接して遠く
我に俳諧の沙汰なし又つく人もなし唯匠車なる小冊の名
どうふ云いさせるがおほつかなく五七五にかなふごとに俳名を
也有といふ「松風の里何処までぞ帰り「生姫の袖縫が引
雛の顔「昼臭やどちら枕も富に合ぬ「睫蹉いつ波で
かくれゆく一年　松木淡々が己を守ぶ里人に機関と伴ふ
初くに對面して「作物の生身だいり枯をば家の識んなる
る大概は数奇なり又通する所の鶉衣も潮は随脳文続
小役籠の俳文其の実体にして鼓舞自在なる上出數
なり殊に宋諸を読み之を挿るもの今まさこく世に

ありすがた静にして人の風流を知たりし

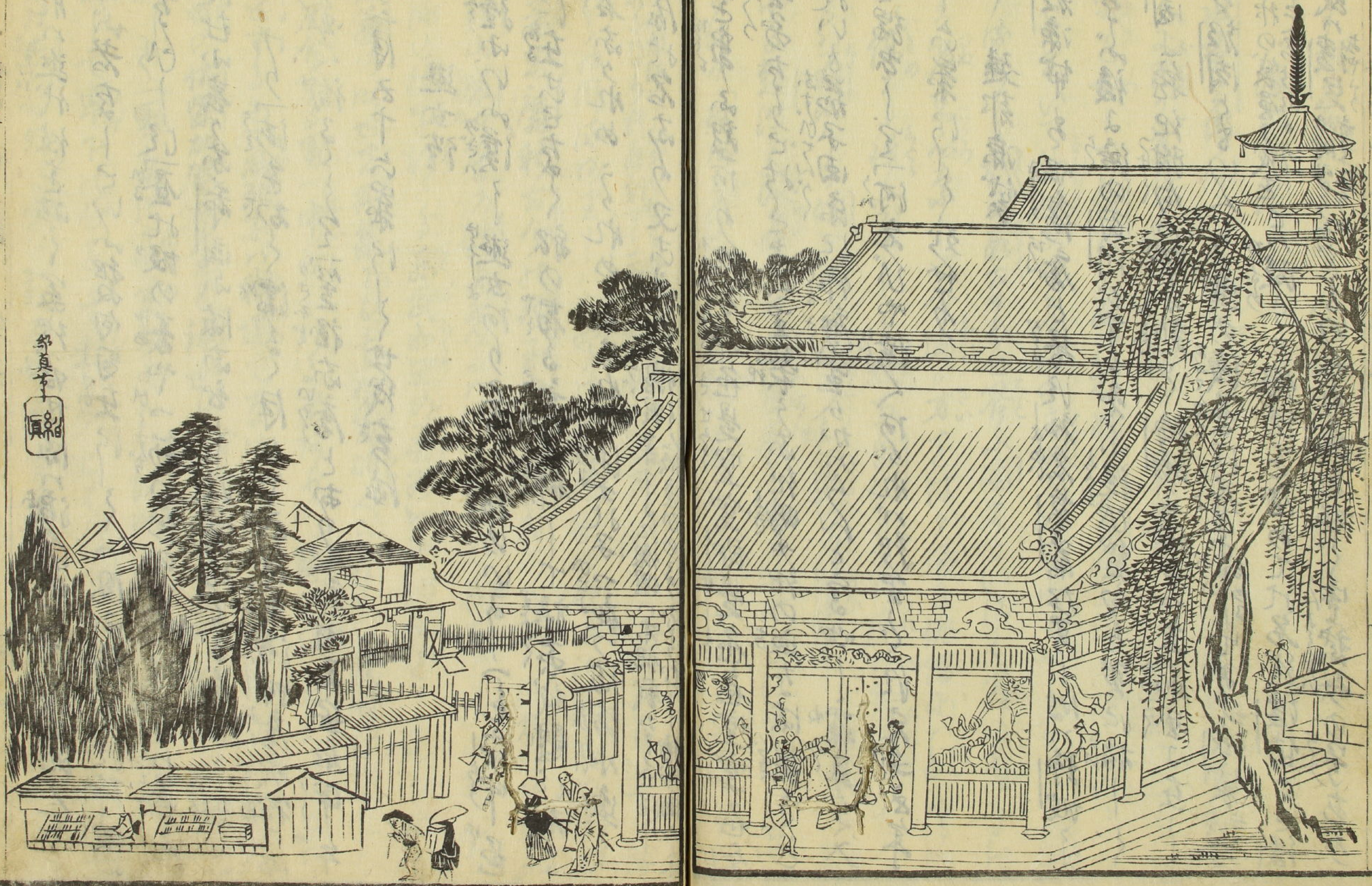
清水超波

清水長左衛門はじめ味噌商人なりしが風流の志あつて
俳人に己が業拙勘ふ一日俄に髪おろして家業の己と長
此家を合して長巳と改む折ふし東嶠が許へ付ひ行きあり
議おごろいて沙河がゆゑなにすゞなれば白やと答ふに巳世掌
此ら所作のちりのぬすみもぞ答ふに議すくいはく岸の麓なきを
老る岸居人ぶしぞ今沙河が才をはり所に俳諧ふは敏あるべし
其が許り近ふ居しと後ち兵佐が才人連ゆ紀風して
ふとれ猶ふ行り議が見る所おを遠ざけ遂くりし一世の栄着
とある超波と改名して独歩庵と号し水香に密なけ支
師が門に一暫ばびの称を積ね出る業縦あぶ又祇空に隣ぬり

物生事ぶ毅かり仏まで即色是空空即是色色空空色色
二無分かりぞれとまへ里裂ろ死骸の血な波臭きと
山れいも蔬子回来に作麿生かわらんと宮唯し寐耳に入
てに瑞出して「河えびや陸へあがれば秋里ぐ花見ぬ年
三十六翁にして死せり

建部涼袋

建部涼袋は吸露庵と号し初名葛鼠なりし時は野坡に
随ひし後に浩の百川が方に名をか従ひ数句を賀に採られしく
希因は鞍紀附句の勢ひに勉く梅路に依る一年必在し
此古翁超園ともいふり武の浅草に居を卜してより涼袋浅草寺門
安風祢の伐戸の銭をその改より俳諧を廃めて片名残遠
り己を名けれがよ
古織り変見世時分ら行ともいへり画を好ぐ寒葉斎の号あり


紹真筆
紹眞

されば近代伎を以く多我為せ衆は沿前にて淀々と此人々
並ぶ者なしといふ発句自在にして一風に拘らず「踊坂
波吹わし江「昼は坂の夢や一筋いとのつる「村しは茶屋
霞むや春の末寺園に波はなし江「浦ちどる千鳥も嘸江
明けにけり「海を出て濡るる月白や五月雨浅間嶽の鳴
漂ふ人詢すとて「笠祖にも岩屋と云ふ初時雨安永甲午
春三月五十六歳にして世を去る

遊女浮

しきしまの道には汀ならて遊女なりき我持のいずして宮居邑
里に在りて宿る客を聚して旅客我慰にせしかば
和名あがれめうかれめ遊女うかれめ海士の子一夜づつ波音水逸
よ依は名なり又も非なり傀儡棄するに傀儡は木偶戯なりと注して
人形遣ひのことなりとあり掾酉の

より人形遣ひし多くありく遊女の人形を遣ひ出しあまた輩じ
来れるなり物語する鮑物句撰の附録にも詳なりぞもいへり古
昔より此風流ある里しは古今此宮め後撰の拾遺後拾遺の宮本
詞花の麗新古今此妙玉葉風雅の初君あるひは近世江口の君
此勝山宗女等の歌よ見るは嫥く並く我なりいふにたんぐ
風流の称をうくる者哉此里の奥州は言はずもがなど
蕉翁の時世に撰集にも其句載せられさら或時むつましく
遊里会る男へ申言したる者ありて契りを交へしがあら
んとするに「飛び死なば我塚でなけ子規とありしとぞ此時人
後世の作業加賀なる里と評せり同所遊女の来らざる客を
詠じ「男なき寝覚えまさらい坂かくに同じく深きに人り
美し「卑下此をさ「言数のに入るもなげかし暑の菊の花
なれ此歌つまゝ実なる女あり平生茶代の紋を附しき

なに里と答ふる人に答へく「旅立する身に似合し紙子いろく
難波の梅めでにかゝし述懐し「我形を眼川風は糸柳　越前の三
国府里に前川といひし女のわりくかまじ来る男の里
二夜三夜宿らで暁おもに帰る我打ちうみく「行水の一夜で
よりや藤右衛門来れ梅め何がし武時の吟「思ふまゝと積でも
山路は鶯はつかに何気の花は娼妓すまじらん多波とりへる者その
実情を吐ふ「我をのきて曲輪様くせ凡中おすゞく藤雲
「初雪や誰が跡を尋ね川夜着同じ「蔵」友瘦と今まぎるる
洞の前のまきの種情何るいまもを従容といふ題しくおほく
何旅

俳家奇人談巻之下大尾

おほよそ古人の為て来趣をあらひてそのたぐひ哉
何つ見ふかてあそぶあて實に古人哉交と之と
いふへし蚕心集撰集折隠逸傳なとみなその道なり
往年蒿蹊子三熊海棠氏と事て閑田老人が
筆哉加是畸人傳が梓編をあらはして大に
世に行る俳家にもまさしき人なきむやとて
玄々一といふ人ひとへみその例にならひて俳家が
奇行あるもの文明より近世かこ八十餘人をあつめて
はじめ坐右の友となす此人眼を失ふて見る

ますくなしといへどもよく古人は志に鑑
みからずして其の撰に及ぶ尋常明眼の人に
心識あるかぎりは此を以て通しや古人は
よく志るする此人なりしも雑の部へ至かの色をも
季なもの梅の志那あるを通し其孫子青々子校正
上木して世に披露すまた人々の目のためにす
何つくかつ春暮れ志たふともへし柿人に任に
諦なさへよと氷黒主人より中おくらる世に風雅
をとなふるものなき見るに打なくも此序を

一のさ添て勝敗ものゝいとてまれまれの編集するを
なされこれ三子はるかに流俗な出てうらかな家
風流なはく支俳家に於て其さ寄りありといふへし
口を請て是をよみ上件の人しれるへきに法るに
此の三子乃畸人を招くりといふへく於保田

丙子春

其亀法嗣俳士

不随齋成美跋

豊久識録

玄玄居士略傳

男　書書　述

先人竹内玄玄一は攝陽高槻に生れ成童にして稍く
明誠實に附り同道加友の名高き人の俳諧へ導かれて
好まふに於ては勧らましけり虚室中宵の色を見るにつけ
たゞ此何を思ふとも甲斐なかりんと答へし我左右愚
ひそ尚書にいはく唯心を獨り心眼の明らかなるを揭
渡すのぶ者に謁する所から深く感して一代まで見るがみる
まずの月の色と喩へし一句に感激せられより「暑わす
流る風に驚くと雪附る里遠く千里を一歩より起
るといへば掛けたりしは京に至り使家に移らはゞやと
直ちに雪つまのく「秋風やあれ掃に成り柳よふ里に
一句我法しより往くに数多の紙筆を費せ里打ケし

瓢水重厚と交遊して道を討論するまた他なし一世
郊里を出て諸国を経歴するの志あり潜に亡て桜泉の
閑に諷詠す傍ら十許年去て武の江戸に来り深川
一庵を卜して嘗て渉る所唐吾山に帰く俳事を談ずる事
茲に一年あり又存義貫帰桜門鶯に従ふ数年
集会す明和中宮句当に進み京橋の西に居す又嫁
居を有無衫といひ又竹窓と号す「吾窓もなつかし
渇まり「腫小屋へも活学の浙活や牡丹「西が水の水に
成けり秋風年間立春に「霄の中に春や出替り
三河より又病後春に逢ふ「人ばかり死ぬとはおかし此
春まで「孫の顔見てや許さん秋茄子といへるに躍出して
いはく世に喝ふ秋茄子嫁の汁に摘ませし椒よ嫁

に喰すると是姑の嫁を悪での事とて人おらん里なにはなに
生生縁に茄子は生実を利すして女を含す子を宮
換ず妙に覚えて氣を動し中を冷る時は是継子
の生ぜざらんことを歎ての謎なりと或人その俳諧に淫する
を嘲る者あり解して曰く杜氏の詩癖庾公の和歌癖なり昔
盛衰俳諧は屈んまた智者なれども皆なら我好めり
我俳諧すれば一癖ある屋しこ国和歌をも嗜
或時菅谷正ぬし事道の事など語て申しけるは
「行秋の深ぬ木の葉は紅葉はみぢ葉のつき
と云ぬし「言もみぢ飛ぬ神しほの玄に雅いろ
詩人より露を時ならぬも何かも実にあれども又法雅
志望に学んで我をす旅て儒士を尊崇し追く諸

我儕となし妻女家事をまかして和漢の傳記を讀しむ是
者は不明を顧みざるなり始め東武へ来てより人の困窮を
救ふことを好みければ身の浮沈をも不交野る或は富る
者より金銀を借りて貧窮人に資用に施しければ自から償ひかね
有餘を損して不足を補ふは天の道なりとて歴驗に古める
ますく此くのごとし文化改元の年中秋廿五日我所をわく[illegible]
享年六十有三谷中長久院に葬る

春日有感　庭裏有梅先人常愛故詩意及之　懐洋散人

忽逢世上物華移遊者如斯歳月垂庭際嘗聞言外道一篇
中徒覺詠餘辞梅花似雪閑空地淺雪若梅感舊時無奈
窓前人去裏春風令獨憶支離

云云府君與余有舊臨聞指含宿草是懇

賦以寄竹子得二　蘭谿　滕　謙

孝子其何似周朝恩豈平敬恭桑梓道活歴風聲遺稿
傳時俗簒編肆世名因君追慕切此係法雛鳴

題俳家奇談　水戸　森庸軒

父遺此書子刻之風流道義具于茲詩歌不及俳諧妙披巻
直逢花月師

たらちねが残せし照る
ことの玉まり月星り　竹内亜郷

中くに今日を送りて我紀魂や此日は増るらむは数く

子は父の遺稿を亜郷ぬしへ
まうし出て　江戸　塙撿校

世おもしろし云ふは禁ぞや来たく
なき人思ぶ種となりけらむ

なき人の云ふは禁ぞくく思へとや見し面影も露は残りぬ　水戸　岡田一琢

言勝　菅谷正直

十年はまりみし面かげも露け月に月夕る道ゆく手櫂茶菱

長勝　岡田光令

験あれば尽えぬ蹲き安濃の庄なれど志のぶ人のいかし

安棄院玄玄居士

牽牛花や
主り見れば
又の
弱がくけ

玄玄男　晋青

うつむいて見る底は里あけれは庵

玄玄妻　不英

露れ月に十葉はまりの秋を川て

短冊以下略

おは世我玄里したらちをの云おける文ども、總く五巻
六巻の草紙とは成ぬ弱ある夕あるに考へ侍るとなつかし此
いやはし道ゆきし年月や竹のふしぐに積る思ひ
は凡十あまり三とせは風ある家んぬ折れば医は才子の気
れし晋子がいふみもはらんずれど俳諧すける志にめで
素より和歌ある者ある論を我等一句我恵りんい
まや様林の一枝崑山は片玉ましく其泉への手向やつ
加まるが華ある所ごとく之に海さらんとし
あさが屋や手向の竹まは海さんども

晋青

諸国名家追福発句 并拾遺 前後不拘次序

篠原といへる所を経けして竈馬なく　江戸 完来

降雨の中にもれくやゆきれつゆ　同 道彦

並になれば露いあれども丈なる月　同 白芹

初秋や村雲のうげ地抜は一夜　同 五世 宗瑞

さんなる日も昔りし京の家の桐一葉　同 蓼石

粟飯のうれしう秋の月日かな　同 冝麦

露を秋と定めし人ぞ慕ふべき　同 午心

墨染の袖かはいさびし露の友　同 堂来

せみの声すゞしく鳴や秋の蝶　同 仙鶴

水の月んすゞしを嬉けふの月　同 青阿

三日月の隈りし咲出も紫苑の花　同 兆

浮世ごとも老とまいらじ月みれば　同 成美

おもかげはいざ野分けし手向かな　同 平秋

夕暮や猶おもはする鴫の声　同 四碑

咲からに涼し名や野菊のむかし今　同 魯冥

蕨尾草の水や弘誓の船のまゝ　同 四世 一瀟

名浩水ば涼もうけよ秋の月　同 三世 古鶯

琴の音の数ふやちらしも夜の秋　同 崑山

みのむしや今も昔りし声啼すず　同 二世 貞佐

松葉のうら実生は落葉なくとも　同 五世 玄恵

松風あり十三夜の秋ゆかし　同 二世 存義

水呑ればらかりけり秋のかぜ　同　二世　乾什

人は身に荻の上風おぼえけり　同　二世　紀逸

葉鶏頭や利休が好む紅も飛鳥川　同　三世　愷亭

東海秋の松色でなりし海小雨哉　同　三世　冬映

幾筋とかりなすまど庭の霧　同　佛乎

武ざ抱けば持人来ふかり秋は暮　同　六世　湖十

雖はもぎれ去のこ絶まつや水のおと　同　二世　永機

羽良やめぐる稲のたむけぐさ　同　百叢

霧や霧十葉あ波里は石なひろ　同　亀貝

華やまほろう紅葉今も咲く　同　三世　平砂

いなづまや岩まくらざけく波の中　同　逸我

我も入る煙りに人の秋のくれ　京都　蒼虬

去ふまぬ露かや残れる川ぶしき　同　壺雄

薬は香やまづし紅葉をなぐさむる　同　定雅

松かしろいちが戸ばゝん秋の月　難波　月居

何をして今日は暮らぞ木槿が花　同　菊和

阿さがほや露を一日蔓はし　同　奇淵

松なぞ久の升とつで文よ松里ぐれ　伊勢　丘高

達磨やはびと去るりも残里ぐれ　近江　烏頂

雨戸まで光らす家や菜はなの香　河内　来雛

花すゝき夕ぐれぐさのつらね哉　尾張　岳輅

けさまでもみるや落ちる月は草　同　竹有

秋ば多しの宿里み多曳かな流之哉　三河　卓池

名月や照とつゞまじよもすがら　同　秋挙

め鏡落月はかくらば老ぬ屋し　甲斐　可都里

山里やまご世をしらも京紀の藤　同　嵐外

樵さ紀の酒かるゝなりぬ鳥の声　越後　嵩嘯

山の井の水汲よ散くる葉のはな　加賀　斗谷

寝覚て手摘が帰しやけさの秋　信濃　素檗

中くに人もむかれく秋の暮　同　一茶

いかさしや遊く帰るあきの山　出羽　葛三

露けきにいでて心れんげの清水　下総　太節

七夕も薮で乞ちさん紀の家　安房　松長

東雲や芸をさむき薜がつく　陸奥　乙二

かゞ紀秋や起く仏と主が波ず　東都　素仁

米多く拾ふてはびし紀の陰の家　同　平角

華ノの秋をまちらする世をさらぬ　周防　雷沙

古き比まずぞ露縁のたことらか　豊後　月化

初秋の夜つ紀中すし淡の手れ　長崎　鶴風

魂迎露は座ら世話ひ居り　肥後　並竹

お手ぞ淋るもなかねど桐おちる　安芸　篤老

稲妻にかさ心も居る笹屋かな　松前　布席

いなつまや独りおちる涼杯書　薩摩　蘭叟

附ていふ諸国英士の秋詠おろひ入といへども重畳するゆゑの許多なれば秦胡遊屋だくわく句撰求る了役[illegible]を以て此中を泉なり

蓬盧青青先生撰目

一　俳家奇人談　全三冊　出来　青青先生著

竹窓玄玄大人遺意

一　續俳家奇人談　全三冊　同　著

八条園寥松先生補校

前編奇人談後の落穂を拾ひ近代の名家数多を白雄蓼太暁台なんど[illegible]の人に至るまで俳諧の諸名家一人として洩るゝ事なく其伝を詳にして著く[illegible]おもしろき逸話をあげ古人の風調を窺ひ其句中を[illegible]且夜半翁の画かれたる芭蕉十哲像並に[illegible]の図を[illegible]筆勢少しも[illegible]模写し其外種々の古画縮図を[illegible]この書画珍宝の見合ともなるべくすべて初編に[illegible]

一　椿年画譜　和人物之部　全一冊

一　同二編　人物花鳥虫魚草木山水之部　全一冊

前北斎為一画狂老人書図

新編 繪本　漢楚軍談　全部四十巻　近刻

世に通俗の書[illegible]漢楚軍談[illegible]

蓬盧青々山人著

蕙齋紹真臨図

俳家奇人談　前後六巻　出来

宗祇貞徳[illegible]俳諧の祖と[illegible]

天保十二辛丑孟春新刻

書林

大阪心齋橋通博労町　河内屋茂兵衛

江戸大傳馬町二丁目　丁子屋平兵衛